

〈論文〉

テレビドラマにおけるクリエイティビティの現在

—『逃げるは恥だが役に立つ』を中心に—

伊藤孝一

要約

日本のテレビ放送が始まって64年が経ち、テレビはメディア・コミュニケーションの中心的な役割を担い、人々に大きな影響を与えてきた。テレビ番組のなかで、報道やスポーツとならば大きな存在であり、大衆文化を先導してきたのがドラマである。今日、インターネットやスマートフォンの普及によるデジタルネットワーク社会の進展やオーディエンスの視聴環境がドラマの企画や表現の創造性＝“クリエイティビティ”に大きな影響を及ぼしていると思われる。ドラマは「時代を映す鏡」といわれて久しいが、時代とドラマの創造性＝“クリエイティビティ”との関係に視点をおき、現在のテレビドラマにおけるクリエイティビティを考察する。

キーワード

テレビドラマ クリエイティビティ 共感性 人間らしさ 社会現象化

I はじめに

日本のテレビドラマで本格的にビデオ収録が実用化され、技術的な先駆けとなったのは1958年10月、ラジオ東京テレビ(KRT、現・TBS)の『私は貝になりたい』(主演:フランキー堺)である。これまでの「生ドラマ」と呼ばれる生放送からくる制約を破り、豊かな表現をつくる流れをつくり出した。その年の芸術祭賞を受賞し、「電気紙芝居」¹⁾と酷評されていたテレビドラマが初めて人を感動させたとして、テレビドラマ史上に残る重要作品と位置づけられている。

1970年代に入ると、ビデオカメラのコストが低減化し技術的制約もなくなり、脚本家の台頭もあいまって、テレビドラマは飛躍的發展を遂げた。『ただいま11人』(1964-1966年、TBS系)に代表されるような家族の和、規範を主題としたハッピーな大家族を描くホームドラマから、平穏無事な家庭に潜む家族崩壊の姿を描き、家庭のゆがみを直視するホームドラマが主流となった。山田太一の『それぞれの秋』(1973年、TBS系)、『岸辺のアルバム』(1976年、TBS系)、『思い出づくり。』(1981年、TBS系)、『ふぞろいの林檎たち』(1983年、TBS系)や向田邦子の『時間ですよ』(1971年、TBS系)、『寺内貫太郎一家』(1974年、TBS系)、『冬の運動会』(1977年、TBS系)、『阿修羅のごとく』(1979年、

平成29年10月30日受付 平成29年12月12日受理
いとう こういち: 淑徳大学 人文学部 兼任講師

NHK)、倉本聰の『白い影』(1973年、TBS系)、『6羽のかもめ』(1974-1975年、フジテレビ系)、『前略おふくろ様』(1975-1976年、日本テレビ系)、『北の国から』(1981-2002年、フジテレビ系)などが大衆を魅了した。山田太一・向田邦子・倉本聰は「シナリオライター御三家」と呼ばれた。この後に有能なシナリオライターが続き、テレビドラマはエンタテインメントを担うコンテンツとして大きく進展してきた。

しかし、この数年、「視聴率が取れない」「俳優が出演を拒否する」「バラエティ番組枠に変更する」などという声が聞かれ、テレビドラマは不振といわれている。

本稿の目的は、テレビドラマの現在のクリエイティビティについて、多メディア化が進む時代や視聴環境の関連から考察することにある。

テレビドラマが不振といわれている状況のなかで、視聴率や話題性の観点から、この1年でのヒットドラマである『逃げるは恥だが役に立つ』(2016年、TBS系)を取り上げ、上記の考察を試みる。研究調査にあたっては、文献調査に加えて、テレビCMやテレビ番組をはじめ、さまざまなメディアの企画・制作・演出に長年携わってきた実務経験を持つ筆者のネットワークによる情報を活用し、本稿のベースとした。

II ヒットドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』を支えるクリエイティビティ

ここで取り上げるのは、『逃げるは恥だが役に立つ』(2016年10-12月、TBS系)である。月刊『Kiss』(講談社)掲載の海野なつみの同名漫画が原作で、主人公2人の〈契約結婚〉を軸に、さまざまな男女の社会問題を織り交ぜたラブコメディとなっている。

彼氏なし、大学院修了なのに内定ゼロ、さらには派遣切りにあい誰からも必要とされない辛さ、居場所のなさを感じている25歳の主人公・森山みくり(新垣結衣)が、あることがきっかけで恋愛経験のない独身サラリーマン・津崎平匡(星野源)と「仕事としての結婚」をすることになる。夫=雇用主、妻=従業員という契約結婚を描いたストーリーで、番組につけたコピーは「社会派ラブコメディ」であった。

第1話から最終話までのサブタイトルと視聴率は以下の通りである。

第1話	プロの独身男と秘密の契約結婚	10.2%
第2話	秘密の契約結婚! 波乱の両家顔合わせ	12.1%
第3話	一番好きです! 契約妻の突然の告白	12.5%
第4話	私、恋人を作ろうと思います!	13.0%
第5話	ハグの日始めました!	13.3%
第6話	温泉一泊旅行にまつわるエトセトラ	13.6%
第7話	あのキスのあとさき	13.6%
第8話	離婚と実家と運命の相手	16.1%
第9話	あの人に好きだよと言われる3日前	16.9%
第10話	恋愛レボリューション2016	17.1%
最終話	夫婦を超えてゆけ	20.8%

平均視聴率 14.5% (視聴率:ビデオリサーチ調べ、関東地区・世帯・リアル)

1. ストーリーの中の人間性によるクリエイティビティ

原作者の海野は、「触れられるのが嫌な相手でなければ一緒に暮らせるのではないか」と思ったことが、この漫画の始まりで、「漫画やドラマでハードルを上げ過ぎて『本当に相手を好きなのか、愛しているのか?』とか考えてしまうと結婚はすごく難しいことのように感じました。愛していると相手の気持ちを考えて自分の言いたいことを言えなかつたりしますが、お見合い結婚でうまくいった夫婦もたくさんいます。『そこそこ好き』くらいの方が、相手への期待もそんなにならうまくいくのではと思ったんです。」と語っている。契約結婚というモチーフにするドラマや漫画は昔からあり、その多くは金持ちと愛のない「玉の輿婚」から愛が生まれるといった内容だったが、「それらとはちがう切り口でビジネスもののテイストを入れてみたところ、女性からは『こういう仕事をしたいのだけれど相手がない』、男性からは『こんな男に都合がよすぎないか、そんな女性が現実にいるのか』といった感想を多数受けた²⁾」とのことである。

また、高齢童貞・高齢処女もテーマの1つであるが、自らを「独身のプロ」というほどまでに「独身をこじらせている」津崎については「面倒くさいやつだなあ、でも、こう思うってしまうのよね、しょうがない、しょうがないと思いつつ描いている」と海野はいう。そして、みくりと「高齢処女」の叔母・百合(石田ゆり子)の関係描写については、独身もしくは子供のいない叔母に可愛がられたという知人の話を元にして³⁾という。

脚本を担当したのは、『図書館戦争』『重版出来!』などの漫画原作ものの実写化に定評のある野木亜紀子である。野木と主演の新垣結衣がタッグを組むのは『空飛ぶ広報室』(2013年、TBS系)『掟上今日子の備忘録』(2015年、日本テレビ系)に続いて3回目であり、新垣の魅力を引きだしている。ただ2次元を3次元にするのではなく、テレビドラマでしかできないものに昇華したいという気持ちと、その技術、構築力を持ち合わせている。

雇用主と従業員という関係の〈契約結婚〉という道を選び、結婚式も挙げず事実婚というかたちで周囲への挨拶を乗りきったみくりと平匡だが、そのよそよそしさをいぶかしがる平匡の同僚やみくりの叔母・百合の眼をごまかすために「ハグの日」⁴⁾を設けるなどして周囲に親近感を醸し出そうとしているうちに、2人の間に本当の恋愛感情が芽生える。大学院まで出て就職先のない女の子と、35年間彼女がいなかった男性が主演というのは、連続ドラマとしては少し異質で地味なものだった。しかし、ドラマの根幹にあるのは、仕事でも人間関係でも「誰かに必要とされたい」という今の若者たちの切実な気持である⁵⁾。

自尊感情が低い男・津崎平匡と小賢しい女・森山みくりのぎこちない恋は「ムズキュン」と呼ばれ、毎週多くの視聴者を虜にし、高視聴率を獲得した。

脚本には、原作のセリフや順序を変えている部分がかかなりあって、原作にないセリフもそのように言うだろうと感じられて自然だった。原作を損なわない範囲で巧みにアレンジし、連続ドラマのフォーマットを活かしたエンタテインメントであった。作中には、主人公たちのモノローグ、つまり〈心の声〉がふんだんに盛り込まれ、登場人物の本音を知るのは視聴者のみという構図をつくった。視聴者は登場人物に感情移入することもできるし、一步引いて見守ることもできる。そして、主人公のエピソードだけではなくサブストーリーも丁寧に積み上げていて、すべての登場人物にリアリティと愛着を感じる脚本である。根底には、「働き方」や「生き方」という、あらゆる世代がそれぞれの立場で共感できるテーマが据えられている。

2. ドラマの楽しみ方を増幅させるパロディを多用するクリエイティビティ

漫画原作にあるパロディを、ドラマでもやることはリスクを伴うことである。脚本の野木は、そこを恐れずに、原作にあったものをそのままドラマに入れるのではなく、テーマ性をもたせてドラマのなかに組み込んでいる。第1話の冒頭が、いきなり『情熱大陸』のパロディで始まるのは、とても大きな冒険であり、作り手の真剣さが問われるものである。毎回のように、みくりと平匡の妄想シーンでテレビ番組のパロディが使われた。

みくりと平匡の妄想シーンでのパロディは以下の通りである。

『情熱大陸』毎日放送・TBS系列一第1話、第8話

『プロフェッショナル仕事の流儀』NHK総合一第1話

『NEWS23』TBSテレビ一第2話

『大改造!! 劇的ビフォーアフター』朝日放送・テレビ朝日系列一第3話

『Eテレ2355』NHK Eテレ一第4話

『新世紀エヴァンゲリオン』テレビ東京一第4話

『パパとムスメの7日間』TBSテレビ一第6話⁶⁾

『ザ・ベストテン』TBSテレビ一第7話⁷⁾

『開運! なんでも鑑定団』テレビ東京一第9話

『新婚さんいらっしゃい!』朝日放送・テレビ朝日系列一第10話

『関口宏の東京フレンドパーク』TBSテレビ一最終話

テレビ番組以外でも、第5話(2016年11月8日放送)の放送日が2016年アメリカ合衆国大統領選挙開票日にあたったこともあり、街頭演説や政見放送などの選挙活動のパロディが挿入されている。

視聴者にドラマの楽しみ方を自ら見つけてもらえるような仕掛けを盛り込み、ロングラン番組のパロディ仕立ては、元ネタを思い出しながら見る楽しさを醸成し、エンタテインメント性を増強している。

3. 丁寧なキャスティングというクリエイティビティ

俳優の起用——配役は、脚本と並ぶドラマの生命線である。ドラマを生かすも殺すも役者次第である。

『逃げるは恥だが役に立つ』の主な配役は次の通りである。

森山みくり・25歳——新垣結衣

大学院に進学するが就職できず、派遣社員となるが派遣切りとなる。求職中の娘を見かねた父に紹介され、父の元部下・津崎の家事代行サービスを請け負う。真面目で頑張り屋の性格。

4

津崎平匡・35歳——星野源

京都大学出身のシステムエンジニア、IT企業勤務。以前から家事代行業者に清掃などを依頼していて、業者を替えようと検討していたところに半ば強制的にみくりを紹介される。高齢童貞で、本人曰く「プロの独身」。

風見涼太・32歳——大谷亮平

津崎の後輩。結婚は否定的。

沼田頼綱——古田新太

津崎の上司。百合とは飲み仲間。クックパットにレシピを投稿している料理上手。

土屋百合・48歳——石田ゆり子

みくりの叔母。通称「百合ちゃん」。外資系化粧品会社に勤務するずっと独身のキャリアウーマン。

日野秀司・40歳——藤井 隆

津崎の同僚。明るくて常識的な性格で妻子持ち、休日には家族サービスを欠かさない。

田中安恵——真野恵理菜

みくりの親友。元ヤンキーで、夫の浮気をきっかけに分かれ、シングルマザーとなる。

梅原ナツキ——成田凌

百合の部下。どこか不思議な雰囲気のあるイケメン。

堀内 柚——山賀琴子

百合の部下。恋に仕事に一生懸命で、前向きな帰国子女。

森山柝男——宇梶剛士

みくりの父。

森山 桜——富田靖子

みくりの母。

主人公の森山みくり役に新垣を起用したことについて、プロデューサーの那須田淳は「抜群のコメディセンス」と「演技力」をあげている。原作を読み進めているうちから新垣がみくり役に相応しいと考えており、新垣が持ち前の明るさとコメディエンヌぶりで、たくさんの笑いと共感、勇気と元気を届けてくれる次の展開が待ち遠しくなる、楽しいドラマにしてくれるという期待を込めて起用した⁸⁾。原作者の海野なつみも、もし漫画が実写化した場合に主人公は誰が良いかと友人たちと妄想する中で、「みくりちゃんは新垣結衣ちゃんとかどう?」「ガッキーがやってくれるなら百点でしょ!」と話していたため、本当に新垣に決まったときはとても嬉しかった⁹⁾という。新垣はドラマ出演の依頼を受けて、原作漫画を読んだとき、契約結婚という今までになかった話にスポットを当てている点や就職難や働く女性が結婚できない現状などの現代の問題を取り上げている点が面白く感じた¹⁰⁾という。

津崎平匡役には、これがラブコメディ初挑戦となる星野源が起用された。星野に出演依頼がきたのは、2015年冬頃の『コウノドリ』(TBSテレビ)の撮影が終了したときで、同ドラマのプロデューサーの那須田淳と峠田浩が声をかけた¹¹⁾。峠田は星野を起用した理由について、津崎の真面目でウブで不器用だけれど、かわいらしさも同居している絶妙な空気を出していただけなのは星野さんしかない¹²⁾といっている。

星野の後輩である風見涼太役には、韓国で俳優として活動してきた大谷亮平が抜擢された。風見は一見飄々としていて、何を考えているかわからないが、内面にはしっかりとした芯をもっているという難しい役どころである。さまざまな俳優が候補に挙がるなかで、プロデューサーたちは大谷と会った。大谷の自然なふるまいや柔らかい内面に魅力を感じ、風見のもつ独特の空気を表現できるのではないかと考え、大谷の起用を決めたという。みくりと津崎の仲を詮索するゲイの沼田頼綱役には、古田新太が起用された。沼田は原作でも人気のあるキャラクターで、それぞれの人物を引き立たせるスパイスや潤滑油の役割を果たしている。ムードメーカーでありながら、繊細な一面をもっており、プロデューサーの峠田は、その複雑怪奇な沼田を誰が演じられるのか不安に思っていたが、古田に決まったとき、頭の中で生き生きとした沼田が浮かび、その心配がまったくなくなったという。みくりの叔母でキャリアウーマンの土屋百合役には、石田ゆり子が起用された。峠田は、原作で大人の女性の一面と少女のような一面をもつ土屋を読んでいるとき、自然に石田が思い浮かんだ¹³⁾という。

このように、大手芸能プロダクションに強権的にブッキングされずに、漫画を実写化する際に原作のキャラクターをしっかりと分析し、丁寧にキャスティングしていることがドラマを活写させる原動力となっている。

4. キャラクターの個性を顕在化させる音楽のクリエイティビティ

音楽は、末廣健一郎とMAYUKOが共同で担当している。

オープニングテーマは、姉妹ユニットであるチャラン・ポ・ランタン『進め、たまに逃げても』が起用された。ファンタジーのような手探り感のある世界観を引っ張っていくオープニングテーマとして、彼女たちに依頼された¹⁴⁾。曲はドラマの脚本と原作の漫画を読んだ2人が、ドラマのために書き下ろしたもので、主人公・森山みくりの想いを表現した応援ソングになっている¹⁵⁾。

主題歌には、津崎平匡役を演じる星野源が作詞・作曲し、自ら歌う『恋』が起用された。プロデューサーの峠田浩は、みくりと津崎の恋が深まったり、すれ違ったり、そんなムズムズする気持ちを明るくも切なく表現してくれるのはアーティスト星野源だ、と俳優として星野をキャスティングした時から感じており、主題歌も依頼した。星野の話によると、『恋』は踊りたくてムズムズする、生活を基にしたラブソングである。星野は、この曲を新しい夫婦を形作る世界中の人たちへ捧げます¹⁶⁾ といっている。

『恋』はオリコンチャートで最高2位¹⁷⁾、Billboard JAPAN Hot 100では首位¹⁸⁾ を獲得した。『第67回NHK紅白歌合戦』での星野の出演曲となったほか、2017年の「第89回選抜高等学校野球大会」入場行進曲にも選ばれている。

テレビ番組は、映像と音の2つ要素からなり、音の中心的存在である音楽のクリエイティビティも、このドラマをヒットコンテンツにした要因である。

5. 社会現象となった「恋ダンス」というクリエイティビティ

ドラマのエンディングで、出演者たちが主題歌『恋』のPVのダンスを踊っている。振り付けは、振り付師のMIKIKOが担当した。ドラマの舞台となる星野が演じる津崎平匡の家で、新垣、星野、石田、大谷、古田が可愛らしい振りを次々に披露する。特に可愛らしい動きの新垣に対し、星野は役柄とギャップのあるキレのある動きを披露している。11月27日には、藤井、真野、成田、山賀が踊る別バージョンが番組公式サイトで公開された。かつて自身のギャグやヒット曲『ナンダカンダ』などでダンスを見せていた藤井のキレのある動き、アイドルとして活動していた真野の安定的なダンスに注目が集まった¹⁹⁾。12月9日放送の『ぴったんこカン・カン』に石田がゲスト出演した際に、司会のTBSアナウンサーの安住紳一郎と星野と3人で踊る「ぴったんこカン・カンバージョン」が制作され、番組公式サイトで公開された²⁰⁾。また、第10話のエンディング映像には安住も出演し、NGバージョンなどが収められた「特別バージョン」が放送された。

6

この通称「恋ダンス」は、1分ほどの長さであるが、企画立上げから完成まで約3ヶ月かかっている、プロデューサーの峠田から作曲の星野には「踊れるイメージ」という希望を伝え、星野自身もそういうものをやりたいと考えており、制作サイドと星野の想いが一致した²¹⁾。「恋ダンス」は初回の放送前から番組の公式InstagramやYouTubeにおいてイントロ部分が公開されて話題になっていたが、初回放送後に、さらに大きな反響を呼び、新垣については、ブレイクのきっかけとなったポッキーのCMを彷彿とさせる²²⁾ といわれた。エンディングで披露されている「恋ダンス」映像フルバージョンが、10月13日に期間限定でTBSのYouTube公式チャンネルで公開され、「恋ダンス」と第2話予告の動画は10月18日23:59の公開終了時に再生回数約609万回を記録した。TBSのYouTube公式チャンネルにおい

て最高視聴回数となった。そして、視聴者からの要望に応え、第3話予告とともに「恋ダンス」映像フルバージョンが放送され、TBS系列のJNN各局も、自社アナウンサーやスタッフなどを起用して、「恋ダンス」を踊っている動画を放送し、ネット配信した²³⁾。

ネット上では「恋ダンス」を踊る様子を撮影し、その動画、いわゆる「踊ってみた動画」をYouTube、Twitter、Instagramなどに投稿するブームが起こり、エキサイトニュースのライター・小西りえこは、このブームは2013年のAKB48の『恋するフォーチュンクッキー』のそれを思い起こさせる²⁴⁾と指摘している。有名人もこのブームに反応した。ドラマの出演者の山賀琴子は、自身のInstagramに個人的にダンス動画を投稿。ダンスボーカルグループDa-iCEの工藤大輝と和田颯、フェアリーズの野元空と林田真尋はプロのパフォーマーならではのキレのある動きでダンスを再現した。それとは対比的に、サバナの高橋茂雄は振り付けの特徴はとらえているものの、ゆるいダンスを踊る動画を投稿した。その他、乃木坂46の井上小百合と堀口央奈、元アイドルリング!!のメンバーで新垣の所属するレプロエンタテインメントの後輩でもある菊地亜美と大川藍、酒井藍がセンターを務める吉本新喜劇メンバーなども投稿した²⁵⁾。JNN各局のアナウンサーらによる動画もその局ごとに公開され、毎日放送(MBS)バージョンではMBSのマスコットキャラクター「らいよんちゃん」の着ぐるみ人形が「恋ダンス」が社員たちと踊る動画が公開された。

駐日アメリカ合衆国大使のキャロライン・ケネディがサンタクロースのコスプレをしてアメリカ大使館、アメリカ総領事館の外交官、職員らと踊り、「恋ダンス アメリカ大使館・領事館バージョン」として、アメリカ大使館公式YouTubeで公開した²⁶⁾。フィギュアスケートの羽生結弦が「フィギュアスケートGPシリーズ・カナダ大会」に出場した際、会場入りする時に人差し指を立てる「恋ダンス」の特徴的な振りをしながら移動し、その様子がTBSのスポーツ番組『S☆1』で放送され、注目を集めた²⁷⁾。ドラマのエンディングの主題歌PVの「恋ダンス」がテレビを越境してさまざまなメディアで発信され、社会現象化し、番組ブレイクのキラーコンテンツとなった。視聴者に楽しんでもらうという、ドラマの作り手の想いが横溢している。

Ⅲ 恋愛と結婚というドラマの普遍的なテーマの現在を描く〈共感性〉というクリエイティビティ

1. 人間らしさの量を描く共感性

日刊スポーツは、フジテレビの火曜ドラマ(関西テレビ制作)からの撤退、ビデオリサーチによる関東地区の視聴率調査方法の変更²⁸⁾、地方局が視聴率をけん引したパワー、野木亜紀子の脚本、恋ダンスがヒット要因²⁹⁾と指摘する。さらにコツコツと情報リリースを欠かさずネットやSNSを盛り上げ続け、〈押し売り感〉のない自然なブームの醸成も挙げられる。視聴者がみくりと平匡の重要な場面でのすれ違いに苛立ちを感じているのではなく、応援しつつ楽しんでいる。近年のドラマにみられるような激しい展開とは相反し、恋愛ドラマの王道である〈じれったさ〉を穏やかに表現している点である。加えてコツコツと情報リリースを欠かさずネットやSNSを盛り上げ続け、〈押し売り感〉のない自然なブームの醸成が挙げられる。『逃げ恥』の公式Twitterなどで発信された「ムズキュン」という言葉が話題を集めた。それはみくりと平匡の2人の恋愛がなかなか進展せず、〈じれったく〉て〈ムズムズ〉するところに胸キュンすることを指す³⁰⁾造語である。

自分はダメ人間で、こんな自分を受け入れてくれる人なんていないに違いない、という平匡のあきらめ。求めるのは自分ばかりで、相手は求めてくれない、というみくりの悲しみ。これは多くの人が人生でのなかで味わったことがあることだと思う。あっ! これ私だ、と感じる回数が多いドラマである。

その他の登場人物も、それぞれ軸の通った生き方、考え方が与えられている。これは、より多くの人が共感できるようにする工夫である。『逃げ恥』は、少女漫画にありがちな超非現実的な設定だらけであるが、こうして共感の量を大盛にすることでリアル感を醸成している。共感のキャラクターを人間らしくして、その生き方に興味を持たせる。いつのまにか、この人はこの後どんな人生を歩むのだろう、ということが気になってしまう。物語のキャラクターが持つ人間らしさの量が視聴者を惹きつけている。

これは、自尊心をめぐるドラマで、恋愛や結婚の意義を現代的に再構築したドラマである。みくりと平匡を中心に描いているが、この世界で生きるみんながそれぞれの呪縛から解放されるまでの〈もがき〉がテーマだった。「恋ダンス」や細部にこだわった演出、キャストिंगがドラマの個性化を醸成する。しかし、このドラマが視聴者を惹きつけるのは、根底に愛や、常識とされているものを1度ひっくり返して考えさせる姿勢があったからだと思う。恋愛だけではなく人生を面倒と感じる人に、面倒を楽しみに変える方法があることを示している。そして、脚本の野木亜紀子のセリフが〈現在〉をとらえている。全編にわたって、ストレスが過剰になりすぎない、その回のストレスは必ずその回で解決する、次回へつなぐものを必ず入れる、ということを実にキープし、視聴した今回のカタルシスと次回のワクワク感を同時に覚え、来週も見たいと思わせる構成となっている。

2. 社会問題提起による共感性

契約結婚を続けるうちに次第に恋愛感情がわいてきた2人。事実婚ではなく入籍したいと言い出した平匡は将来のために〈小遣い制〉を提案する。しかし、みくりはその条件にどうしても納得できず、入籍を先延ばしにしてしまう。同じだけ家事をやっても入籍前と同じだけの給料をもらえなくなる。それを当然と思うか、理不尽と思うか。数値化しにくい専業主婦の労働という社会問題を提起している。

朝日新聞と毎日新聞は、このドラマがテーマの1つとした「労働としての家事」に着目して分析を行っている。朝日新聞は、原作者の海野とプロデューサーの那須田へインタビューし、作品を通じて「家事観」や「結婚観」の多様性を伝えたいと考えていたことを紹介し、作品が主婦の家事に対する価値が注目されるきっかけとなった³¹⁾としている。そして毎日新聞は、竹信三恵子(和光大学教授)の「女性の生きづらさや貧困へのからくりを、構造的かつコミカルに突き放して描かれている点が人気を博したのではないか」、藤田結子(明治大学教授)の「女性が普段感じているモヤモヤを言語化してくれたことが共感を呼んだのだろう」などのコメントを通じて、女性にとっての身の回りの社会問題を論文や新聞でなく、漫画やドラマという形で伝えたからこそ共感が得られたのではないかと³²⁾としている。

朝日新聞出版のニュースサイト「dot.」は、主演の新垣、星野のキュートさに加え、みくりと平匡の関係性、あるいは百合をとりまく人物による結婚観や女性観を通じて描かれる「旧来的な価値観」に対する登場人物の葛藤が、視聴者にとって「人ごと」ではない社会の空気とともにあることが共鳴を生んだ³³⁾と評している。契約結婚の家事労働の賃金換算に踏み込んだが、金額や形式に正解があるというよりは〈自由な意思の隠喩〉としての契約であり、みくりを甲とし平匡を乙とする、独立した対等な個人であることの意味とその確認である。

このドラマのヒット要因は、社会問題として主婦の家事労働を提起し、主婦の家事労働を価値あるものだと認め、主婦を味方につけたことである。

IV ドラマの楽しみ方を視聴者に見つけてもらう創造性の構築

このドラマは放送開始から11回のすべての視聴率(ビデオリサーチ調べ、関東地区・世帯・リアル

タイム)が前回は上回る、もしくは横ばいになり、原作と合わせて「社会現象化」した。12月20日最終回の視聴率は、このTBS「火曜ドラマ」史上初となる20.8%となり、全国平均視聴率も同枠初の2桁となる14.5%の視聴率を獲得した。

つきあう前のもどかしい時期、小さなことに一喜一憂する。お互い近づきたいのに近づけない、この距離感は『逃げ恥』の大きな魅力である。老若男女が共感できる「あの頃」を提供している。契約結婚という発明によって恋愛における最高の時間、つまり「交際に発展する直前」を引き延ばすことを可能にした。そして、いつまでも眺めていたい、そんな契約結婚はお互いの好意を確認し合った瞬間に「恋人」にシフトし、崩壊することは明白であった。視聴者を喜ばせていた〈ムズキュン〉の数は、計画結婚崩壊のカウントダウンだった。

『逃げ恥』は、回を重ねるごとにクチコミがひろがり、普段ドラマを見ていない層に波及していったという点で、同じTBSの『半沢直樹』(2013年)のヒットに似たパターンである。作り手の想いを感じ、他の視聴者の反応も楽しみながらドラマを見るという体験が新鮮で、SNS時代の新しいテレビの楽しみ方があった。

プロデューサーの峠田浩は、3年前まで報道番組の部署で『サンデーモーニング』『朝ズバッ!』などを担当していた若手である。ドラマの部署に異動してから、これが3本目。前作は『コウノドリ』で、星野源と出会った。峠田は雑誌³⁴⁾のインタビューで次のように答えている。

「ドラマの部署に来てから、いろいろなドラマを見るようにしていますが、見てみると面白いドラマがたくさんあるんです。でもラブコメと聞いた途端に、見るとか見ないとか決めてしまう人もいます。面白いドラマであっても、そもそもドラマを見ない人にはなかなか届かない。そういう人たちに面白さを知ってもらうためにはどうしたらよいか、今回はそれを考えて、いろいろ工夫しました。『恋ダンス』のそのひとつです。そのほかにも、主人公がドラマで作った料理をクックパッドとコラボしてレシピをネットで公開するとか、舞台となった横浜市と共同でイベントをやるとか、日産と組んでCMを作ったりとか、日頃ドラマを見ていない人にも触れるきっかけを作れないかを考えました。」

「もうひとつ心がけたのは、制作側が楽しんでドラマづくりをしている雰囲気が届くようにしたいということでした。毎クールたくさんのドラマが放送されているなかで、この番組を見もらうには、それまでのドラマのイメージとちょっと違うという感じを出すことも必要だと思いました。例えば第1回の冒頭でいきなり『情熱大陸』のオープニング画面と曲が流れる。あるいは第2回では冒頭からいきなり『NEWS23』のスタジオが映ります。見た方は、チャンネルを合わせ間違えたかとびっくりすると思うのですが、そういう遊び心というか、何か違う、やらかしてくれるぞという試みをたくさん盛り込んでいます。」

注目するのは、ある程度、ドラマは見る人が固定しているため、普段見ていない人に訴求するために接触ポイントをいろいろと考えたということである。峠田がそこに集中できたのは、以前に報道・情報番組を担当していたことも関係しているのではないかと思う。

ドラマ視聴者を拡大させるさまざまな工夫。各種メディアを横断するコンテンツのネットワーク化。『逃げ恥』のヒット現象は、テレビとSNSなどのネットの関係や、番組パロディ、音楽・ダンスが社会現象化するなど、考えるべき新しい要素を含んでいる。次のヒットドラマを狙っているドラマ関係者だけでなく、メディア・コミュニケーションに関わる多くの人にとっても考えるべき貴重なコンテンツである。

V おわりに

多メディア化が進む時代や視聴環境のなかで、現在のテレビドラマのクリエイティビティやヒット要因について、筆者なりに回答を提示した。

ここで提示した共感性——主人公や登場人物に、あっ！これ私だ、という感じさせるものと人々が抱く社会問題の提起によるもの——は、つねに思っているけれど口に出して言えないことを上手くロジカルに可視化できていたリアリティである。そして、普段ドラマを見ていない人々への接点に、さまざまなアイデアを配置して関心を抱かせて視聴者を拡大させるという、制作サイドの熱量の大きさがドラマのクリエイティビティを高めるエンジンである。

クリエイティビティは、テレビドラマの根幹である。刻々と変化する時代や視聴環境との関係から、テレビドラマを注視し、考察を続けたい。

〈注〉

- 1) 今野勉『テレビの青春』(初版) エヌティティ出版、2009、p.15
- 2) 松澤夏織「高齢童貞、派遣切り『逃げるは恥だが役に立つ』は、実は社会派漫画ドラマが好調だが、原作を御存じか？(1/2)」講談社現代ビジネス http://gendai.ismedia.jp/articles/_/49913
- 3) 松澤夏織「高齢童貞、派遣切り『逃げるは恥だが役に立つ』は、実は社会派漫画ドラマが好調だが、原作を御存じか？(2/2)」講談社現代ビジネス http://gendai.ismedia.jp/articles/_/49913
- 4) 2017年3月28日には、翌日に発売されるブルーレイ・DVDを告知する「火曜日はハグの日」というキャッチフレーズの新聞広告が朝日・毎日・読売・日経の4紙に全面で掲載された。
- 5) 『『逃げ恥』プロデューサーが語る』朝日新聞
http://www.asahi.com/and_w/interest/entertainment/CORI12082404.html
- 6) プロデューサーの那須田が演出を担当していた。
- 7) 『『逃げ恥』みくりの“心のベストテン”は平匡さんが独占 視聴者も共感のパロディ』モデルプレス <http://mdpr.jp/news/detail/16382651>
- 8) 「新垣結衣、“ワケあり新妻”で連ドラ主演『逃げるは恥だが役に立つ』」モデルプレス
<http://mdpr.jp/news/detail/1600992>
- 9) 「ドラマ『逃げ恥』主演は新垣結衣！海野なつみの妄想キャスティングでも“百点”」ナタリー
<http://natalie.mu/comic/news/195970>
- 10) 「インタビュー新垣結衣 森山みくり役」TBS http://www.tbs.co.jp/NIGEHAJI_tbs/interview/
- 11) 「インタビュー星野源 津崎平匡役」TBS http://www.tbs.co.jp/NIGEHAJI_tbs/interview02.html
- 12) 「星野源、新垣結衣の“契約夫”でラブコメ初挑戦 主題歌も担当〈コメント到着〉」モデルプレス
<http://mdpr.jp/news/detail/1606404>
- 13) 「ドラマ『逃げ恥』百合ちゃん役は石田ゆり子！風見は大谷亮平、沼田は古田新太」ナタリー
<http://natalie.mu/comic/news/199745>
- 14) 「チャランポ、新垣結衣&星野源主演『逃げ恥』でオープニングテーマ担当」ナタリー
<http://natalie.mu/comic/news/202685>
- 15) 「ガッキー絶賛！チャランポ書き下ろし『逃げ恥』OPテーマ配信で登場」ナタリー
<http://natalie.mu/comic/news/206853>
- 16) 「ドラマ『逃げ恥』星野源が35年間彼女なしの独身男・平匡役に！主題歌も担当」ナタリー
<http://natalie.mu/comic/news/198412>
- 17) 「恋」オリコン <http://www.oricon.co.jp/prof/32429/products/1197993/1/>

- 18) 「星野源『恋』、2週連続 JAPAN HOT100 首位」 Billboard JAPAN
http://www.billboard-japan.com/d_news/detail/43540/2/
- 19) 「『逃げ恥』“恋ダンス”新バージョン公開 藤井隆・真野恵理菜ら登場」 モデルプレス
<http://mdpr.jp/news/detail/1640117>
- 20) 「TBS 安住アナ、石田ゆり子との“恋ダンス”に挑戦」音楽ナタリー
<http://natalie.mu/comic/music/news/212437>
- 21) 「『逃げ恥』小ネタにも全力『恋ダンス』は星野源と制作陣が思い一致」スポーツニッポン
<http://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2016/11/01>
- 22) 「『逃げ恥』のガッキーの“恋ダンス”が悶絶版『ポッキー以来の衝撃』」モデルプレス
<http://mdpr.jp/news/detail/1623161>
- 23) 「地方局でアツイ『恋ダンス』面白いのはどこ」日刊スポーツ、2016年11月28日
- 24) 「『逃げるは恥だが役に立つ』エンディング『恋ダンス』を凶解してみた」エキサイトニュース
<http://www.excite.co.jp/News/reviewmov/20161102/E1478052084400>
- 25) 「『逃げ恥』“恋ダンス”踊ってみた動画が一大ブーム キレキレのプロ、完全パロディ 個性あふれる再現続々」モデルプレス <http://mdpr.jp/news/detail/1628618>
- 26) キャロライン・ケネディ大使 Twitter <http://twitter.com/CarolineKennedy/status/811167114526502912>
- 27) 「羽生結弦も『逃げ恥』ファン?“恋ダンス”披露にファン騒然」日刊大衆 <http://taishu.jp/detail/25353/>
- 28) 2016年の下期(10月3日～)からビデオリサーチの関東地区の視聴率調査が変わり、従来のリアルタイム視聴率に加え、録画視聴のタイムシフト視聴率と総合視聴率の調査が開始された。
- 29) 梅田恵子「敵失、新視聴率『逃げ恥』が引いた5つの幸運」日刊スポーツ、2016年11月20日
- 30) 「新垣結衣主演の『逃げ恥』大人気の背景にある『ムズキュン』」Livedoor ニュース
<http://news.livedor.com/article/detail/12297435/>
- 31) 「『逃げ恥』で考えた、結婚って? 家事って? 愛情って?」朝日新聞、2016年12月23日
- 32) 「逃げ恥 ドラマ大ヒット 無償の愛 有償の家事?」毎日新聞、2016年12月24日
- 33) 香月孝史「なぜ『逃げ恥』は“国民的ドラマ”になり得たのか?」dot
<http://dot.asahi.com/dot/2016122100095.html>
- 34) 「ドラマ・情報番組の健闘 TBS の次なる課題」『創』Vol.511、2016、p.44

〈参考文献〉

- 岩男壽美子『テレビドラマのメッセージ 社会心理学的分析』(初版) 勁草書房、2000
 NHK 放送文化研究所編『テレビ視聴の50年』(初版) 日本放送協会、2003
 大山勝美『時間を射落とす——ぼくはこうしてテレビドラマを創っている』(初版) 創世紀、1978
 大山勝美『テレビの時間』(初版) 鳥影社、2007
 久世光彦『向田邦子との二十年』(初版) 筑摩書房、2009
 今野勉『今野勉のテレビズム宣言』(初版) フィルムアート社、1976
 今野勉『テレビの青春』(初版) エヌティティ出版、2009
 佐怒賀三夫『テレビドラマ史 人と映像』(初版) 日本放送出版協会、1978
 重延浩『テレビジョンは状況である 劇的テレビマンユニオン史』(初版) 岩波書店、2013
 竹内郁郎『マス・コミュニケーションの社会理論』(初版) 東京大学出版会、1990
 鳥山拓『日本テレビドラマ史』(初版) 映人社、1986
 日本放送作家協会編『テレビ作家たちの50年』(初版) NHK 出版、2009
 萩本晴彦〔ほか〕『お前はただの現在にすぎない』(初版) 田畑書店、1969

水島宏明『内側から見たテレビ』(初版)朝日新聞出版、2014

『KAWADE 夢ムック 文藝別冊 総特集山田太一』(2版)河出書房新社、2013

『KAWADE 夢ムック 文藝別冊 総特集向田邦子』(初版)河出書房新社、2013